

〔「国宝彦根屏風と国宝松浦屏風」展によせて〕

新出の邸内遊楽図屏風をめぐって

経済活動が活発化した近世の都市では、人々が華やかな遊びに興じ、その遊興の様を描く遊楽図と呼ばれるジャンルの絵画が隆盛します。近世初期の遊楽図は、まず野外の遊興を描いたものが盛んに描かれ、次第に視点が屋内へと移ってゆくことが知られます。特に寛永年間(1624~44)から寛文年間(1661~73)頃にかけて流行したのが、遊郭とおぼしき邸における遊びを描く、邸内遊楽図と呼ばれる屏風絵作品です。邸内遊楽図屏風は需要が高かったようで、現在でも四〇点以上の作例が知られています。そこには、豪壮な邸の中での舞い、双六、カルタ、楊弓、三味線、酒宴、喫茶、喫煙、邸と渡り廊下で繋がった湯殿での沐浴、庭での輪舞など、様々な娯楽が描かれています。基本的な構成は共通していますが、作品によって娯楽の種類を絞ったり、増やしたり、遊ぶ人物を女性メインにしたり、男性メインにしたりなどの変化が加えられており、様々なバリエーションが残されています。

本稿では、本年初公開され、「国宝彦根屏風と国宝松浦屏風」展に出陳される個人蔵の「邸内遊楽図屏風」(六曲一双、図1)を紹介し、その位置づけについて考察したい

と思います。本作品の大きさは、他の多くの邸内遊楽図屏風と同様にやや小ぶり、縦113.3cm、横270.4cmです。右隻の第一扇から第二扇は往來の光景で、格子の中の遊女を男性たちが眺める張見世の様子や店の前を行き来する人々が描かれます。第三扇には斜めに横切る塀が配されており、奥に見える部屋では調理が行われています。第四扇から第五扇には二階建ての豪華な邸が描かれており、邸の中では、邸内遊楽図でお馴染みの遊びである、喫茶・喫煙・飲酒・双六・カルタ・読書・三味線・尺八などが楽しまれています。左隻の第一扇から第二扇は湯殿とその隣の部屋が中心に描かれており、着物の前をはだて涼んだり、寝そべったりなど、浴後にリラックスする人々の姿が見えます。湯殿の前の庭では柳が若葉を茂らせており、その横には井戸から水を汲む奉公人などが描かれています。第三扇から第六扇には、花頭窓のある広い部屋における遊びと庭の輪舞が描かれています。この部屋の中の遊びの中心は、舞いと酒宴です。三味線の音にあわせて、扇を手にした女性が舞っており、周りの人々は舞いを鑑賞したり、酒を飲んだりしています。邸の前の庭では、人々が輪になって踊っており、左方から、踊りに加わろうと三人の女性たちが近づいてきてい

ます。左端の池のほとりには、釣りをする若衆の姿が見えます。人物や調度の描写は大変細やかで、手の爪や冊子本の綴じ糸まで繊細に描き込まれています。

邸内遊楽図は人気の画題だけに、一からモチーフや構成が練られるのではなく、先例の図様が参考にされていることが多いです。本作品と特に図様の共通点が多いのが、サントリー美術館蔵の「邸内遊楽図屏風」(六曲一隻)です。たとえば、本作品左隻第一扇の湯上がりに涼む人々は、サントリー美術館本の第六扇にはほぼ同じ姿形を見ることができ(図2・3)。他にも本作品右隻第五扇のカルタをする人物たち、左隻第二扇の髪を乾かす女性、第三扇の酒を飲まされる女性、第四扇の舞う女性とそれを見る人々などとはほぼ同一の姿をサントリー美術館本に見出すことができます。形は少し異なりますが、庭に若葉の柳と水を汲む奉公人を描く点や、地面を金砂子蒔きとしている点も共通しています。一方で、本作品右隻第三扇の調理の場面は、サントリー美術館本には無く、邸内遊楽図の中でも初発的作品として著名な徳川美術館蔵の「遊楽図屏風(相応寺屏風)」の左隻第三扇の図様と類似しています。本作品はサントリー美術館本の系統を中心に、様々な邸内遊楽図の図様を摂取していることが分かります。

本作品の制作時期を考えるため、まず図様の共通点が多いサントリー美術館本と顔貌表現を比べてみたいと思います。サントリー美術館本はほつれ毛が細やかに描かれ、黒目に潤いがあり、冷たさの中にも艶やかさが感じられるのに対し、本作品は髪がすっきりとまとめられ、眉

が細く黒目が小さく、表情が乏しくなっています。繊細な描写ではありますがやや類型化の傾向が見られ、本作品の方が遅い制作であることが窺えます。続いて注目したいのが左隻第六扇に描かれる女性です(図4)。この女性は、片手で襟をとり、もう片手を袖の中に入れるというポーズをしています。このポーズは寛文年間頃に隆盛した一人立美人図で好まれたものです。ここから、本作品は邸内遊楽図の中では比較的后発組で、寛文年間に近い頃の制作と考えられます。邸内遊楽図屏風の中には、片隻に張見世や往來の様子を描く遊里図、もう片隻に邸内の遊びを描く邸内遊楽図を組み合わせたボストン美術館蔵の「邸内遊楽・遊里風俗図屏風」のような作例もありますが、本作品のように、邸内遊楽図の導入部(右端)に張見世の光景を描くのは珍しく、新しい展開と言えます。後発組の邸内遊楽図の中には、画面が一続きではなく、一扇ごとに独立した押絵貼屏風の作例が何点かあるのですが、本作品の黒目の小さいやや固い表情の人物は、押絵貼タイプの邸内遊楽図に描かれる人物と雰囲気感が似通います。本作品は、遊びのエネルギーが冷めて静謐さを帯びてゆく寛永年間末以降の邸内遊楽図の展開を考える上で興味深い作品と言えます。(宮崎も)

※図3は『遊びの流儀 遊楽図の系譜』(サントリー美術館、二〇一九年)より複写。サントリー美術館本(図3)の全図は、上記図録の図35に掲載。

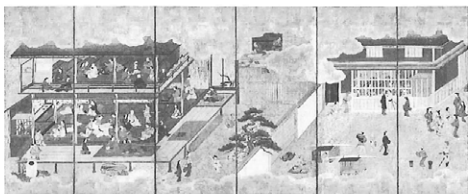


図1 邸内遊楽図屏風(個人蔵) ※上が右隻、下が左隻



図2 図1の部分

図3 邸内遊楽図屏風
(サントリー美術館蔵)の部分

図4 図1の部分

季刊 美のたより No.208

令和元年 10月 2日

発行 大和文華館